

「人に伝わる話を」

目次

- 1) はじめに
- 2) 動機
- 3) インタビュー
- 4) 結論
- 5) おわりに

1) はじめに

「魅力を感じる人へのインタビュー」というテーマがこの授業で与えられたとき、私は、直感的に、インタビューができる相手などいないのではないかと考えた。「自分の周りの魅力的な人」という言葉ですぐに連想した人たちは、なぜかそこまで親しいとはいえない人たちが多く、そのような人たちにインタビューを申し込むのは、少々唐突なようで気恥ずかしく感じたのだ。それに、話が弾まないかもしれない、表面的な話に終始して本質的な話が引き出せないかもしれない、それではインタビューとしての価値はないのではとも思え、インタビューをすることがためらわれた。

次に、それでは、日々の些細な出来事の話から、観念的な話まで、毎日心ゆくまで色々な話をする兄弟はインタビュー相手としてはどうだろう。会う頻度は少ないが、話をするたびに深い満足感を覚え、刺激を受ける友人は。話はしないが、居心地のよさや愛らしさを感じる人は、どうだろうかと考えてみた。私は彼らを信頼しているし、認めてもいる。だが、やはり彼らにインタビューをしようとは思えなかった。なぜだろう？彼らのことは好きだ。魅力的な人間でないとも思っていない。けれども、「魅力ある人」という言葉から私が受けるニュアンスは、私が彼らに感じる感情とは決定的に違う。

そこで、気づいたのが、ある程度の距離感があることが、私にとっての「魅力」の条件の一つなのではないかということだ。誰かに魅力を感じる時、私はその人が持つ、光の部分を見ている、もしくは、「こうあってほしい」「こうあるべきだ」と私が考える資質を持っていることを評価しているのだらうと思っていたのだが、それは理想が投影できるからという意味でなのだろうか。新鮮さや好奇心を越えて、私が魅力に感じるのは、「こういう人だったらいいな」という期待なのだろうか？

また、そういう人とは、色々話をして考えを分かち合ってみたいと感じていることにも気づいた。話が通じる、わかりあえるということが、私に対人関係で重視する事柄のようだ。それが、私の感じる「魅力」とどう結びついていくのだろうか。

2) 動機

その疑問を考えるためには、やはりある程度距離があって、魅力的に思える人と話してみなければいけないだろうと私は考えた。友人と話すように話が弾んだからといって、それがこのインタビューの成否には必ずしも直結しないのだろうとも思い当たり、唐突でもいいから、本当に魅力を感じる人に、思い切ってインタビューをお願いしてみようと思った。

そこで、私は、かつて自分が漠然と憧れを抱いていた、出身高校の校長先生をインタビュー相手に選ぶことにした。私が卒業したのはカトリックの中高一貫校なのだが、彼女はその経営母体であるカトリック修道院のシスターでもある。彼女と私には個人的な交流はなく、基本的には私がその生徒だったとき、朝礼や始業式・終業式で、もしくは学校からの各種のお便りを通じて、彼女の「お話」を私が聞いたという関係だ。

彼女は、見かけは上品そうなおばあさまといった感じで、おっとりとした雰囲気を持っていたが、同時にとても明晰な方であった印象がある。その印象は、私が彼女の話聞いて受けたものだ。彼女は、話のうまい方だった。その話には、押し付けがましさがなく、つつい耳を傾けてしまうような引力があった。欲張ってエピソードを詰め込みすぎることがなかったからだろう、長すぎて退屈することもなく、行事のたびに話を聞くのがとても楽しみだった。私はそれまでそんな大人に出会ったことがなかった。親とも、仲のよかった担任の先生とも違う彼女を自然と尊敬できて、私たちの学校での、「校長様」という呼び方にもすぐに馴染めた。

面白いのは、私が彼女を思い出するとき、懐かしく思い出するのは、話の内容よりもむしろ、落ち着いた声のトーンでゆっくりと話す姿と、なんとなく威厳に満ちた佇まいだということだ。にも関わらず、どんな人だったか誰かに伝えようとすると、話のうまい人・みなをひきつける話のできる人だったという説明になる。彼女の「お話」に対するとりくみかたを、私は好ましく思っていたのだと思う。彼女が明晰だと私が感じたことも、話しがわかりやすかったことも、憧れを抱きつつもそれほど遠い人だと思わなかったのも、このへんに理由がありそうだ。

実際に話をして、「お話」をするときに彼女が大切にしていることや、彼女のコミュニケーションスタイルを聞き、彼女の性格や考え方にふれることにより、私が考えている魅力の源を確かめてみたいと思った。

3) インタビュー

随分久しぶりに、かつては通いなれていた駅に降り立ち、校長様を訪ねていく。

修道院は最近改築されたので、一瞬まるっきり知らないところに来たように感じる。それでいて、前の通りを歩くと左手に桜並木の土手が見える、変わらない景色を懐かしく感じる。不思議な感覚だ。

久しぶりにお会いしたシスターは、以前と変わらない印象だが、今年で80歳になったという。今回のオファーを、喜んで下さっているようで、こちらとしても嬉しい。年齢のことを聞いて、そんなにお歳だったか驚いた。年齢という観点から彼女を見たことはなかった。が、考えてみれば、彼女は、私の在学中も60代後半から70代であったのだ。私の受けた、押し付けがましくなく、色々なことを受け入れている、言ってみれば「悟っている」ような印象は、年齢から来た部分もあるのだろうか。

3)- 宗教的なバックグラウンドをきく

まずは、彼女の価値観形成に大きな影響をもたらしたであろう宗教的なバックグラウンドを尋ねる。

洗礼を受けたのは、生後8ヶ月のとき。当時、パリの修道院から、日本に宣教に来ていたフランス人司祭たちがおり、校長様のうちにも巡回していらした。神父様から教えを聞き、そのすばらしい、立派な人徳に傾倒して、お話を聞いて、家族全員で洗礼を受けたそうだ。それからは、宗教教育を受けた。

「それほど教会に行ったわけじゃないから、父が熱心でね。朝晩のお祈り。それから、夕食の後で、聖書物語の本を読んでくれてね。子供をみんな集めてね。月一回は神父様が回っていらっしゃる。」

「小学校5年生か6年生のときにね、シスターになろうと。神父様のお姉さんとか妹さんがシスターだったのね、それでその写真を見てね、ああ、シスターになりたいなあなんてちょっと思ってたの。それほど、はっきり自分では、決めていたわけじゃないけどね。だんだんだんだね。よく、『誰々さんと結婚する』なんて、話し合うのよね、共学だったりすると。小学校共学だったから。『でも、私は結婚しないの。』なんて言ってね、ほほほ。」

とても自然な流れで宗教者への道を歩んでいったことがよくわかった。漠然と、でも確固として『シスターになろう』という思いが、あったようだ。

女学校を出て、修道院の寄宿舎に進み、高等専門学校(今でいう私立大学)歴史科に進学、教員免許を取得。修道院経営の高等女学校に教師として赴任。中学校の日本史と高校の西洋史を教えていたが、途中で教育改革により新制高校ができる。西洋史の授業は世界史の授業に変わり、十分に指導ができるようにと、通信教育で新制大学に通うことになる。

時を同じくして、最初の赴任先から、姉妹校である私の母校に小学校の主事として移る。それから4年間で、新制大学卒業の資格をとられる。同時に近くの大学で、夜間の神学講座に通われた。

そのときに、歴史哲学を通じて、人間の物語を学び、それで人間への理解を深められたそう。それに影響を受け、心を伝えたいと思うようになったという。

「私は、子供たちにお話をするときに、知識はもうね、高校生なんかの国語とかすごいわよね、難しい言葉とか使って。だから、知識的なことは話すこともないし、こころをね、育てたいってことをとって、いつも話を選ぶときにね。もちろん知恵の知育ってことをするけれど、心を育てたいなあって、いう考えで材料を集めたりしていた。」

3)- 心がけていたこと

先ほど、心を伝えるとおっしゃいましたが、本当に伝わった気がして、印象深く覚えています。お話しするときにとくに心がけていたことはありますか？

「それは、わかりやすくね。そして、心にしみこむような、心に残るね、話をしたいなと思ってた。」

思っても、なかなかできないんじゃないですか

「そうねえ、そうね、やっぱり、いろいろ聞いたり、本を読んだりね。あ、これはいいなあ、とか、本当に、できる自分の範囲でね、とっといた。うん、これは子供たちにお話したいなあ、とか。卒業生からのお手紙で、よかったりとかね。割合に、そういう点で恵まれた。特別な苦労はなかったけど、うん、一応ね、終業式に間に合うようにね。後は、そのときの世界情勢とかね、見ながらね。」

なるほど。伝わるための技術についてはどうですか。今だったら、書店でも新聞広告でも、それこそあちこちで目にしますけど。何か特別にお勉強されましたか。

「PHP っていうんだった、あれ、ずいぶん助かったわよ。いい言葉がね、それからいい考え方、ってのがかなり載ってた。」

うーん、そういうことは、お話をされる方なら、大体してらっしゃいますよね。なにがちがうんだろう。

「それに、私が聖書で大切にしているものが加わったかな。聖書の言葉。具体的には福音書と書簡。とくに、聖パウロの書簡ね、そこできいたこと。私たち毎年8日間の黙想っていうのがあって、毎年神父様から聖パウロの書簡などについて聞いてたわけ。そういうものに、中身が濃くなるのを助けられたかもね。」

このとき私は、当然のように、「そういうことは、お話をされる方なら、大体してらっしゃいますよね」と言ったが、今思えばこの発言は間違っていたように思う。いろいろなものに目を通すのは、「伝えよう」ということに心を砕かれているからではないか。つまり、彼女は伝えるべきことを持ち、それが相手に伝えわるよう考えてらしたのではないだろうか。

3)- 細かいことで怒らない~一人一人を大切に

キリスト教の教えが根底にあるわけですね。でも、それはほかのシスター方も同じですよ。ほかのシスターのお話を聞いていて、私たちのために思ってくださいるのはわかっても、反発したくなる時がありました。

「うん、それはわかる気がする。私あんまり、いらいらするとか、怒りたくなるようなこととか、言いたくないから。」

性格的なことですかね。校長様は、細かいことで怒ったこと、ないですよ。なぜですか。

「私、恵まれてたのよ。そういうの、きちんと指導してくださる先生方がたくさんいらしたから。ああ、ただ一度だけね、スカート丈については、生徒指導部長の先生にお願いされて、一回だけ特に朝礼で話をしたことはある。あなたが入る前ね。ソックスなんかについては、怒る先生いらしたから、それは、先生に任せといた。その先生がなさるので、私がいちいち言わなくてもよかった。だから、一回だけね、スカートの丈。」

校長様は言わないほうですか。校長様自身は気にならない？細かく言う先生もいらしたけど。思っても言わない？

「言えは言うほど、反発するでしょう、あの年齢って。だから、そういう細かいことよりも、もっと大事なことがあるんだからっていう考え方かな、はっきりそういったわけじゃないけど。だから、やはり自分からは終業式やなんかのたびに言うことはしなかったと思う。」

「言えは言うほど反発する」から、ムキにならずに一步引いていたのは、私にとっては温かみに感じる。彼女の淡々とした話方、落ち着いた態度はこのような姿勢から生まれたものだろう。

「それよりも、人を大切にしてお自分をね、自分をね、大切にしてください。自分を大切にすることができればね、大丈夫。」

『ひとりひとりを大切にするために、まず自分を大切にしてください』

この考えは、中高時代に教わったことの中で、私の体にもっとも染み付いている教えだ。

これは聖書の言葉ですか。

「そう。でも、聖書の言葉ですよ、なんていうと嫌味になっちゃうから。言わないけどね。」

生徒に対しては、ですか。ご父兄には「聖書にありますか」と？

「いえ、言わない。わかってるじゃない、キリスト教の学校だって。学校説明会だと、最初に我が校では神の概念、神様をどういう風に考えるかを説明するの。天地万物を創造なさった神で、自分があるということは神様からいただいたからで、そして神様が私に望まれることを生涯かけて、成し遂げて。そういう使命を持って生まれてきている、と。そして、また神様は天地万物の創造主だから、どこの宗教とか言うんじゃないで、神様がいらして、神様と人のつながりが、命を与えられた。そして、神様の命を全うして、神様に返す。」

「で、神様が何を望まれるか、お望みになったことを実行できていければ。その使命を果たすために、ま、自分は家を選ぶことも、生まれるところである両親も選べないし、だからそれを全面的に受け入れて、いろいろ境遇は違うけど、それに応えて生きていくと。それから、自分もそうであるように、人も命だから、自分を大切にするように人も大切にしてください。そういう風にキリスト様がおっしゃった。」

「『私が、人を愛したようにしてください』。それは大変なことよ。キリスト様が愛したように人を愛してください。あのね、博愛主義じゃないの。キリスト様が愛したように、だから、これは大変よ。私はまだ不十分で、いろいろあるから（笑）。人のために命を捨てるほどの愛はないって言ったでしょ。そのくらいの愛なんじゃない。とてもできないこと。そういうチャンスってのは案外来ないほうがいいと思うけど、あっはは。でも、やっぱり目指してね、精進していかないと。それはね、いけないと思うよ。恵まれた環境にいるんだから。教育に専念できるシスターは幸せよね、ある意味。家庭のわずらわしいこととかないわけでしょ。」

3) - 強さか弱さか人間くささか

ただ、そういうことに迷いはなかったですか。ほかの人生があったかな、とか。

「あ、それはなかった。私は。」

自分の決めた道にまい進しているのは、うらやましい気もします。

校長様はシスターになろうと決めて一筋でこられたんですよね

「(うらやましいと)わかる人にとってはね。校長になるとは思ってなかったけど。」

大学の通信教育と神学講座のお話をされた後、校長様はこうおっしゃったのだ。「そんなことをやっているうちに、急に中高の校長になることになって。私、まさか校長になるなんて思いもしなかったから。もし校長になることがわかってたら、(今の修道院に

は)入らなかったかもしれない。」と。

これにはかなりびっくりした。他になり手がいなかったからだとおっしゃったが、私にとってはすばらしい校長様だったのに。

校長さまは無理に伝えようとはしない印象でしたね。

「そうね、自分でも無理に話そうとか、そういう考えではなかったと思う。」

それは、日常で人と接する中でもそうしてらっしゃる。

「そうね、おなじように話すの、ずっと。生徒にも、先生にも、シスターにも。相手がおそろしく偉い人だったりすると、かしこまっちゃうけど。」

自信があるからそうできるんでしょうか？自分の信念を全うされてるから？

「あんまり全うしてないのよ。人間くさいのかな、人間的なのかな。あの、そんなにね、理想に向かって、子供たちをね、行くように話はするけれど、自分でそこまで行くと思えないし。何だろう、矛盾してるのかもねえ。」

矛盾は否定も肯定もしない？

「そう、自然体なのね。あのねえ、私は話すの大嫌いだったの。」

えっ、それは意外です！

「小学生のころは、人前で話すのとか、劇とかね、逃げ回っていた。すごく苦手で。だから1000人ぐらいのご父兄の前でお話しするのも、そりゃあね、大変だった。しかたがないからやる。はははは。で、仕方がないからいいや、っていうんじゃないでね。覚悟を決めてね、何かやっぱり伝えなきゃあ。」

『何かやっぱり伝えなきゃ』。思うに、やはりずっと、校長様は人に伝えるべき言葉を自分の中に持っていたのではないかという気がする。ただそれを声高に宣言する必要性を感じていなかったのではないだろうか。校長になろうという考えもなかった、そういう人だからこそ、一回一回の話を大事に、丁寧にできたのではないだろうか。それが、私にとっては心地よかったのだ。

話すのが苦手だったけど、何かがきっかけで変わった？

「校長になってから。その前に先生をやったでしょ、少しね。それで話すことができるようになって。それから前の学校のと時の校長さまのお話は、長いな、もう切ってもいいんじゃないかと思うことがあったの。それで、こちらに来て前校長様の話を聞いて、溜飲が下がったのよ。あの方は上手。それだけの能力がおありになった。それに、お声が立派なの。」

そういうのって、ある程度もって生まれた資質なんですかね、それとも後から勉強して？

「私は、校長としては、育ったの。本当にね。前校長様が管区長になったとき、校長をやめざるをえなくて、それで私が急に校長になったから。校長になるんだったら、入らないほうがよかった、なんて。おほほほ。」

校長として育った。今までの校長様の話を聞いて、納得した。「育った」という人だからこそ、私が魅力を感じたものを持ってらしたのではないかと。

いやだったんですか。

「そんな、話をする立場になるなんて、いやでしょう（笑）。」

責任ある立場ということ。

「責任というより、話すということは、本当に私の苦手だったわけ。校長になって、何が一番いやだったかっていうと、話をしなきゃいけないこと、そう、全体に向けてね。責任はね、なんだろうと取らなきゃいけないから。でも、先生たちがよく助けてくださったし、生徒がよかった。本当に。」

結局彼女は41歳で校長になってから、中・高・小で29年間、小学校のみで8年間、計37年間も校長職を勤めた。

3)- 受け入れること

神様が自分にお望みになったことを全面的に受け入れて、実行していくこと。この受け入れることと、『矛盾、人間くささ』（自分の使命を全うできないこと）について聞くことにする。この二つはしばしば対立したことだろう。自分の責任は引き受けた、でも周りにも助けられた。そして一歩引いたスタンスから感じるある種の諦観。

それらが、押し付けがましくない余裕のある話につながった面もあるのだろうが、葛藤はなかったのだろうか。

校長として苦労されたことを伺うと、やはり、生徒の成績が思わしくなく進学できないときや、トラブルがあったときのようだ。こちらが驚くほど、赤裸々にいろいろ話してください。

ただそのスタンスは、「何とかしてあげられなくて申し訳なかった」というものではないようだ。教育者としては、生徒にそういうつまずきがあっても、いいと思うとおっしゃった。深刻なトラブルのときは、先生方に任せちゃったの、どうしていいのかわからなくて、と率直におっしゃったのには、正直複雑な思いがした。しかし、先ほど出た『人間くささ』を十分認めて、卒業生である私に対してもそれをそのままお話になれるのはすごいことだと思った。『こんな言い方したら、って思われるかしら』といった発想はないのだろう。

私は、自分が家庭教師として担当したある受験生のことを思い出した。学力以外の諸事情で、志望校への合格がかなわなかった子だ。私は学習指導の面ではできる限りのことはやったと思っているが、ほかの面でももっと貢献できていれば、違う結果が出ていたかもしれないのに、と思う時がある。そのときにはそのようにしかできなかったんだ、と自分を納得させるようにしているが、それは、もしかして、その時に『やりきれなかった』ことを恥じているから、ごまかそうとしてそう思うのだろうか？そのときの自分ができることをやっていれば、『仕方がなかった』と言えるのだろうか？その話を出して、校長様はどう思うか聞いてみた。「なるようにしかならない」とのことだった。

こちらができることは、自然体でいて、無理しないってことですか。

「そうねえ、そして、信頼っていうのかな。きっと神様が守ってくださる。神に対しての信頼。そうそうそう。摂理的なことだからね、人間の力でどうにもならない。」

それを自分の努力でどうにかできるっていうのは...

「じゃない。自分の力でどうにかなるものだったら、そうなるようにね、しないといけない。そうじゃないことは、それは全部、神様の...信仰ね...偉大なる存在に任せるって言うかね。神様に対する信頼とかね、摂理に対する信頼」

この信頼って言うのは生徒に伝えようと思ってらっしゃいました？生徒に心を伝えたいって、おっしゃってましたけど。一番言ってらしたのは、自分を大切にすることでしたが、それにつながるんでしょうか？関係してるんですか。

「全部つながってる。神様が、私って言うね、小さな存在をね、その存在を使ってね、どういう風に望んでいらっしゃるのかなあ。それを(各々考えるように)伝えることが、私の使命だと思っている。」

それは十分に伝わったと思いますか？今まで。

「そう、今はもう難しくなったからね、80過ぎたからね。もうこれでいいんじゃない？いいでしょう？神様いいでしょうってね(それで引退した)。やっぱり疲れちゃってね。というのは、そんなに能力のある、っていうんじゃない。高峰校長みたいにね。本当に、先生に守られ、生徒に守られていう校長みたいよ。-運がよかった。生かしてもらえたというか。私のいいところを。」

4) 結論

校長様と話をしてみて、一番驚いたのは、飾らなさ、率直さだった。ご自分の思い出話も、おどけた調子でお話になる。大学の通信教育で、本がどっさり届いて大変だったこと、卒業された高等専門学校の卒業旅行の話、校長として生徒に同行した修学旅行の話。シスターや先生方について、名前をあげながら、お話をしたときも、ともすれば噂話や陰

口になりかねないが、シスター中村は冗談めかしながら、軽くのってきて、少し無防備な印象も受けた。

必要以上によく見せようとしなない。そのような姿勢は指導者としては、賛否両論あると思う。安定は望めるが、停滞につながりかねないと思うからだ。しかし、私を感じた魅力の源は、その飾らなさ、力みのないことからきているのだと、よくわかった。自分の言葉で、自分の考えをそのままお話になるから、聞くものの心に届いたのではないかと思った。ゆっくり淡々と話すのも、決して熱意がないからではない。諦観にも見える、焦っていないことは、神への信頼があるからなのだろう。だから、生徒から少し距離を置いたところにいらしても、きちんと見守ってくださった感じを私は受けたのだろう。

ご自身の信念に関わる話になると、柔らかいがきっぱりとした口調になり、また引き込まれて聞いてしまった。ご自分の信念をあまり全うしていない、矛盾があるとおっしゃったが、最終的には満足なさっているのだろうか。

明晰だと思ったのは、伝えるべきことを、伝わるように話された校長様への私の評価だったのだと気づいた。私は「頭のいい人」の条件にコミュニケーション能力をあげたいようだ。

思うに、当時、私が彼女にひきつけられたのは、私が「大人」に期待していたものを、彼女がくれたような気がしたからではないだろうか。子供のころの私は、いつも自分を教え、導いてくれる人を求めている気がする。私の疑問に、きちんと言葉でこたえて、論理的に説明してくれる人。たとえば怒られるときも、「あなたの考えはこうこうこういうことね」と受け止めた上で、何がいけないのかを教えてくれる人。私をわかってくれる人。立場が違うときにそれを尊重した上で話ができる人。話がわかりやすく、一方的ではなかったところに、私は自分の理想が見出せる可能性を考えたのではないだろうか。

とすると、「魅力」という言葉で距離感がある人を思い浮かべるのは、コミュニケーションへの期待が持てるからだと思うに至った。誰かと深く付き合うと、頑張ってもわかりあえていないと感じる場合が出てくる。それも含めてその人と付き合い続けていくし、努力を続けることに正しさも感じるが、いつも、もっと誰かと深く関わりたいと思っているからこそ、新しく出会う人に魅力を覚えるのかもしれない。

5) おわりに

インターアクションにあまり参加できなかったことはとても残念だが、自分では表現しきったつもりでも、指摘されてみれば、その表現の底にあるものがまったく反映されていないということがあり、通り一遍に言葉を紡ぐだけでは、相手に自分の言いたいことがどれだけ伝わったかなんてわからないものだ、と改めて感じた。

人に余すことなく自分の思いを伝えようと思ったら、何度でも何度でも、自分と向き合い、なぜそう感じたか、なぜ数ある類語の中からその言葉を選んだのか、自分の感情の根っこをさぐりにいって、掘り出して、整理しなければいけない。それから、相手に伝わりやすくするために、論理構成を考え、過不足のない表現を選び、語順を考え...そこまでできたとしても、自分と他人は同じものを共有はしていないかもしれない。

このレポートを書く作業中も、気がつけば、あいまいな言い回しや一般論に無意識に頼ってしまっていて、一箇所直すとまたもう一箇所。新しい発見や気になる部分がどんどん出てきて、常に自分に立ち戻るといのはとてもタフな作業だった。読みやすく書くという点でも、引いた伏線の落としどころがなかなか見つからなかったり、同じことを形を変えて言いたくても、効果的に使えなかったり。しかし、それができてくると、あいまいだった自分の気持ちがクリアに見えてきたり、思わぬところで繋がっているのがわかったりして、楽しかった。

ほかの方にコメントするときは、言いたいことが十分な説明を伴って伝えられず、ただの指摘になってしまい、気分を害しただけになってしまったように思うこともあった。

そういうコミュニケーションの難しさを忘れないで、でもその難しさに諦めたり投げ出したりで、一人でも多くの人とわかりあいたいと思っている。

大変勉強になりました。

ありがとうございました。